

《2011年11月例会報告案》

【日時】2011年11月29日（火）19：15～21：10（終了後は「ルン」～12：00頃）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】ラグビーワールドカップとサッカーワールドカップ

【演 者】井上俊也（大妻女子大学）

【参加者（会員）7名】井上俊也（大妻女子大学）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、熊谷建志（会社員）、嶋崎雅規（帝京高校）、白髭隆幸（日本スポーツプレス協会所属フリーランス・ジャーナリスト）、徳田仁（(株)セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（未会員）4名】浦和俊介（(株)フォーレックス）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、★屋繁男（関大サッカー部後援会相談役）、★屋重子

【報告書作成者】高田勝敏

注1）★は初参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

ラグビーワールドカップと サッカーワールドカップ

井上俊也（大妻女子大学）

<目 次>

第Ⅰ部. プレゼンテーション

KICK OFF:自己紹介と今回の発表のきっかけ

1. エグゼクティブサマリー
2. 世界のラグビーの歴史
3. ラグビーワールドカップの歴史
4. ラグビーワールドカップの盛り上がり
5. ラグビーワールドカップの特徴
6. ラグビーワールドカップ、日本の挑戦
7. アジアのオールブラックス、ジャパン
8. プレミアリーグ化するジャパンラグビートップリーグ
9. 2019年ラグビーワールドカップ日本開催

第Ⅱ部. ディスカッション

NO SIDE:活発な意見交換を

〈第 I 部. プレゼンテーション〉

◇KICK OFF:自己紹介と今回の発表のきっかけ

今晚は、本日発表をさせていただきます井上と申します。中塚先生とは前身の社・心グループからこの会で活動をしております。NTTに勤務しておりましたが、昨年大妻女子大学の教授となりまして経営学一般を教えています。

私自身の自己紹介を簡単に済ませますと、サッカーの町浦和で育ちまして大学で慶應の KRC というクラブに所属しております。社会人になり山口県社会人 1 部リーグの宇部クラブ、前身は全国社会人ラグビー大会に出場したこともある宇部興産のラグビー部です。それから当時関東社会人 2 部の NTT 東京でプレーをしました。NTT 東京は現在、トップリーグの NTT コミュニケーションズとなっていますので、世が世ならトップリーガーということになります。その後、フランスへ海外留学の機会があり、フランスの Grande Ecole (高等専門教育機関) である、HEC で 2 年間プレーしました。ポジションはフッカーとフランカーでした。記録としては日英仏の 3 か国で試合中に骨折を経験しました。

今年は HEC 卒業 20 周年ということで、10 月初めに記念パーティーに参加してきました。フランス滞在中に、サッカーそしてラグビーフランス代表の試合を観戦し、思うところありまして中塚先生に相談して今回の発表に至りました。

※10月7日：サッカー欧州選手権予選 フランス対アルバニア。

10月8日：ラグビーワールドカップ準々決勝 フランス対イングランド (ニュージーランド開催の為、テレビ観戦)

1. エグゼクティブサマリー

ラグビーは長い歴史を誇るにもかかわらず、1987年に第1回のワールドカップ(世界選手権)が開催され2011年に第7回大会を迎えました。世界のスポーツでこれほど世界大会が後発な競技は無いと思われる。

他のスポーツのように、ラグビーワールドカップも発展してきたのですが、他の競技と発展の仕方が異なり、その運営は伝統国中心に行われ、また伝統国ではサッカーワールドカップを凌ぐ程の盛り上がりを見せる一方で、日本を含むそれ以外の国では人気がなく、普及という面では課題が残るのが現状です。

そういった状況の中で、2019年に日本が伝統国以外として初めてラグビーワールドカップを開催します。

日本にはトップリーグがあり、その中にはご存知のとおり優れた選手が集まっています。サッカーで例えると、リオネル・メッシとまでは言いませんが、シャビやアンドレス・イニエスタレベルの選手はたくさんいるというレベルになっています。

2019年のラグビーワールドカップ開催は、2002年のサッカーワールドカップの開催以上のチャレンジであるといえます。今日はそれについて皆さんと議論をしたいと思っています。

2. 世界のラグビーの歴史

ラグビーの歴史をサッカーと比較して見ていきたいと思えます。

日本でもよく言われるように、1823年にラグビー校のエリス少年がフットボールの試合中に突然ボ

ールを手を持って走り出した。これがラグビーの始まりという伝説があります。

1863年にサッカー協会（FA）が創立されたのに対して、ラグビー協会（RFU）は1871年に創立され、その年にはイングランドとスコットランドの間で、初のラグビー国際試合が行われました。

なんと、両国間で実施されたサッカーの国際試合よりも、1年先にラグビーの国際試合が開催されたこととなります。

そして、1882年には4か国対抗戦（イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ）が始まり、1886年にはIRB（International Rugby Board：国際ラグビー評議会）が発足しています。ちなみにFIFA（国際サッカー連盟）は1904年に発足されています。

※IRB 発足当時加盟国：スコットランド、アイルランド、ウェールズ

イングランドは1890年に加盟

◆報告書作成者 注)

FIFA 発足当時加盟国：オランダ、スイス、スウェーデン、スペイン、デンマーク、フランス、ベルギー

オリンピックにおいては、ラグビーは1900年、1908年、1920年、1924年に実施され、サッカーは1900年大会から実施され、1908年大会からFIFAに認定されています。

少し日本の話になりますが、日本における初のサッカー国際試合は1917年の極東選手権であるのに対して、ラグビーは1931年の日本対カナダが初の国際試合となり、日本における国際試合はラグビーが後発となります。

そして1930年からサッカーワールドカップが開催されているのに対して、ラグビーでは1949年にオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカの南半球3か国がIRBに加盟、1978年にはフランスが加盟します。ここまでの8か国をIRBオリジナル8と呼びましょう。

その後、1983年にオーストラリア、ニュージーランドがワールドカップの開催を提唱し、1987年に第1回ワールドカップが開催される運びとなりました。また、同1987年に日本、カナダ、フィジー、トンガ、アメリカ、アルゼンチン、イタリアがIRBに加わっています。

2002年にはサッカーワールドカップが日韓で開催され、2019年にラグビーワールドカップが日本で開催されることとなります。

このように、長い歴史を持つラグビーではありますが国際化という点では非常に遅れているスポーツであります。

3. ラグビーワールドカップの歴史

1987年にオーストラリアとニュージーランドで第1回大会が16か国参加で行われて以来、4年に1回のペースで実際されています。会場のキャパシティの関係もあり、観客動員数は1試合あたり3万人から4万人の中で推移しており、サッカーワールドカップの2/3程度のスケールです。

◆報告書作成者 注)

2007 IRB WC 総観客数：2,263,233 （48 試合、1 試合平均：47,150）

2011 IRB WC 総観客数：1,477,299 （48 試合、1 試合平均：30,777）

2002 FIFA WC 総観客数：2,705,197 （64 試合、1 試合平均：42,269）

2006 FIFA WC 総観客数：3,359,439 （64 試合、1 試合平均：52,491）

2010 FIFA WC 総観客数：3,178,856 （64 試合、1 試合平均：49,670）

普及面では課題があると言いましたが、予選参加国は増加していきまして、2011年大会においては93か国が予選に参加しています。

4. ラグビーワールドカップの盛り上がり

先ほど見た通り、観客動員数はサッカーワールドカップの 2/3 程度ですが、ラグビー大国の南半球 3 か国（オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ）のみならず、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、そしてサッカー大国でもあるイングランド、フランスの欧州 5 か国ではサッカーワールドカップを凌ぐ人気と盛り上がりを見せます。

今回のニュージーランドで行われた第 7 回大会では、10 万人以上の観戦者がニュージーランド国外から訪れました。10 万人という数字は一見少ないようにも思えますが、ニュージーランドと言うロケーションで国外から 10 万人をイベントで集めるのは至難の業です。

◆報告書作成者 注)

FIFA WC2006 大会運営委員会は、海外からの観客を 100 万人、パブリックビューイングに訪れた外国人を 923,000 人と見積もっている。

フランスでの事例を挙げますと、2011 年の決勝（フランス対ニュージーランド）は時差があるのでフランス時間では日曜日の朝に開催されましたが、1998 年のサッカーワールドカップの決勝戦（日曜日の夜）よりも多くの視聴率をあげました。テレビ放映に関して言いますと、フランスでは全 48 試合を地上波で生中継していました。これはサッカーワールドカップでは試合運営方法も含め、ありえない状況と言えます。これは競技の特性だけに限らない理由がありますので、後ほど解説したいと思います。

オークランドで行われた 10 月 8 日の準々決勝イングランド対フランス戦では 6 万人のうち 17,000 人が、同会場実施の 23 日、決勝戦では 8,000 人がフランス人の観客でした。このほとんどはニュージーランド在住のフランス人となります。

また 10 月 8 日土曜日朝のイングランド対フランス戦においては、カフェ（スポーツバー）が予約制になっていました。前日のサッカー欧州選手権予選、フランス対アルバニア戦ではこの現象は起こっておらず、金曜日の夜には自由に入れたカフェが土曜日の朝は予約制になったことに私は非常にびっくりしました。

2007 年のラグビーワールドカップはフランスで開催されましたが、その際に 1998 年のサッカーワールドカップの際に起こらなかったことがいくつか起こりました。まず、外国から来るラグビーファンの為に新聞が英語版を連日制作しました。これはスポーツ新聞だけでなく、日本では読売新聞に相当するフィガロが英語版を発行していました。そして、年金問題のゼネスト期間中であつたにも関わらずフランス国鉄は試合の当日には臨時列車を運行しました。また、町中の英語案内表示が普及したのは 2007 年のラグビーワールドカップの際です。テクニカルな面になりますが、サッカーでも見られるスタジアム真上からのテレビ中継を始めたのはこの 2007 年の大会からです。

フランスは、ラグビーは強いけれどもサッカーは弱いじゃないかと思われる方もいらっしゃると思いますが、確かにサッカーのフランス代表は、2010 年 6 月の FIFA ワールドカップでは酷い有様でしたが、ところが 2010 年秋から始まった欧州選手権予選ではグループ D を首位で通過し、2010 年 9 月から 16 試合連続負け無し、この間にはイングランドやブラジルにも勝利しており、非常に勢いのあるチームです。

◆報告書作成者 注)

1998FIFA ワールドカップフランス大会優勝監督のエメ・ジャケは、94 年の就任から 96 年欧州選手

権準決勝チェコ戦に PK 戦の末破れるまで 27 試合負け無し。

フランスサッカー連盟 HP 参照

http://www.fff.fr/servfff/historique/selectionneur_new.php?id=JACQUET

対して、ラグビーのフランス代表は 2010 年の 6 か国対抗戦では 5 戦全勝優勝を果たし、日本でも評判になりましたが、それ以降は黒星続きです。2010 年夏の南半球遠征では南アフリカ、アルゼンチン相手に最多得点差試合で歴史的敗戦を喫しています。そして今年の 6 か国対抗戦では、なんとイタリアに 6 か国対抗戦で初黒星を喫し、監督はベテラン人気選手を追放しました。昨年夏以来、南半球 3 か国並びにイングランドには全敗とフランス代表史上最悪のシーズンと言われており、ワールドカップ前に代表監督の更迭が決定しました。

このように昨年後半から現在のフランス代表においては、サッカーの方が圧倒的にラグビーより実力があります。にも関わらず、フランス国民はラグビーのフランス代表の方に注目し、テレビの視聴率などではラグビーが上回っています。

5. ラグビーワールドカップの特徴

ラグビーワールドカップの特徴としては、伝統国と言われる 8 か国の存在感の大きさがあります。先ほどから出てくる伝統国とは、かつて 5 か国対抗といわれたイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、フランスと南半球のオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカとなります。ラグビーの世界ではアイルランドは島全体ですので、サッカーで言うところの、北アイルランドとアイルランドを足したものになります。

どのような存在感かという点、開催国、優勝国、準優勝国は常に IRB オリジナル 8 となります。ここまではそれほどのことではないのですが、IRB オリジナル 8 はかなりの確率で決勝トーナメントに進出しています。4 チームないし 5 チームでの予選リーグの上位 2 位が決勝トーナメントに勝ちあがる形式になっているのですが、これまでのべ 54 の決勝トーナメント進出チームのうち 49 チームをオリジナル 8 が占めています。これは競馬でいえば恐るべき連対率です。例外はウェールズが 3 回(1991、1995、2007)、アイルランド 1999 年に、スコットランドが 2011 年にそれぞれ 1 回失敗しています。そして予選リーグにおいて IRB オリジナル 8 を破って決勝トーナメントに進出したケースは 4 回(西サモア 1991、アルゼンチン 1999、2011、フィジー 2007) しかありません。

IRB オリジナル 8 は非常に安定した力を誇っています。このようなことが起こる原因として、ひとつは競技の性格上番狂わせが起こりにくいです。ラグビーは実力に勝るチームがボールを保持し続け、得点するまで、攻撃し続けます。実力の劣るチームが守りを固めて数少ないチャンスを活かしてカウンターで逆転するというケースは少ないので、番狂わせは少なくなります。また、体力や体格に依存するセットプレーもありますので、競技として当然のことだと思います。これは日本国内でも同様です。

ただ、ここからラグビーという競技そのものでなくワールドカップ運営のポリシーになってくるのですが、前回大会に好成績を残した国に有利な仕組みに大会のフォーマットが最近変わってきました。その有利な仕組みとしては、本大会までの道のり、大会形式、大会の審判に分けられます。

まず本大会までの道のりですが、前回大会で上位 12 か国、つまり予選リーグ 3 位までのチームが予選免除となります。これにはどういったメリットがあるかという点、予選の代わりに同レベルの国とのテストマッチを組むことが可能になります。ラグビーにおいては、原則として同クラスのチームとテストマッチを組む事となっており、サッカーのように日本対ベトナム、日本対アルゼンチンという試合はありえない事となります。つまりランクが下の国は強い国と試合をする事が出来ません。

次に大会形式ですが、強い国は試合と試合の間に十分な間隔が設けられています。2011 年大会ではランキング上位 12 か国は 22 日間から 24 日間で予選リーグ 4 試合を行い、下位 8 か国は 16 日または

17日で4試合をこなすスケジュールでした。

そして審判団については、IRB オリジナル 8 からのみ 10 人の主審が選ばれており、そのうち初出場は 2 人だけです。3 回目、4 回目の人も多く、つまり審判をやる人も決まっています、そして担当する試合も決まっているという状況です。

日本人では 1991 年に八木宏器さんが選ばれたのが最初で最後になります。

◆報告書作成者注)

2010FIFA WC 主審担当者の内、2006 大会でも主審を担当したのは 8 名。

もともと競技の特性上、弱小国が強豪国に勝つ事が難しい事に加え、ワールドカップ並びにナショナルチームの試合においては番狂わせが起こりにくい構造になっています。では、何故このようなことをやるのかということなのですが、この IRB オリジナル 8、人気チーム、実力チームを優遇する事がポリシーになってしまっています。例えば、人気チームの試合はゴールデンタイムに実施されます。開催国のニュージーランドと時差の無いオーストラリアは金曜の夜もしくは週末に試合があり、欧州 5 国はヨーロッパ時間で週末の午前中になる、週末の遅い時間帯に試合を行う事が基本になっています。つまり人気、実力のあるチームが週末または金曜日の夜に試合を行う事が最初からセットされています。例外はスコットランドで、平日に 1 試合行いましたが、これは前回大会で決勝トーナメントに進出できなかったため、結局それに見合った日程となったわけです。競技の平等よりも、とにかく強いチームの試合をみんなが見たいということが優先されます。サッカーワールドカップのように予選リーグ最終戦が同時刻に開始されるなんて事は無く、ニュージーランドの試合を見て、イングランドの試合を見て、それが終わったところでフランスの試合がキックオフといった感じで試合スケジュールが組まれています。日本は残念ながらその犠牲者といえますか、「人気チームの登場しない時間にやっておけば」といった感じで試合日程が組まれています。

これはラグビーワールドカップがサッカーのチャンピオンズ・リーグに似てきたのではないかなと思っています。91 年まではチャンピオンズ・カップと呼ばれ 92 年からはチャンピオンズ・リーグとなったわけですが、かつては各国のリーグチャンピオン、1 チームしか出場できませんでした。今はリーグの力に応じた強豪チームが出場してきます。つまりイングランドから 4 チーム、フランスからは 3 チーム、イタリアからは 3 チーム出場等でキプロスのような国のチームは予選リーグから戦わないと出場できない大会形式になっています。また、チャンピオンズ・カップ時代にはホーム&アウェイのノックアウト方式でしたが、チャンピオンズ・リーグとなりホーム&アウェイのグループリーグの後に決勝トーナメントとなり、有名、人気チームの試合はどんなに少なくとも 6 試合は見る事ができる方式になりました。チャンピオンズ・カップにもシードはありましたが、2 レベルしかなく、弱小国と強豪国のリーグチャンピオンの差は 1 回戦を戦わなくてはいけないか否かくらいのものでしたが、今では UEFA インデックスによってシードが細かく決められていて強いチームが有利になっています。今年度第 1 シードにランキングされたのは 8 チームですが、世が世ならこの 8 チームの中で大会に参加できるのは、バルセロナ、マンチェスター・ユナイテッド、ポルトの 3 チームのみで、他の 5 チームは UEFA カップまたはカップ・ウィナーズ・カップに出場することになっていました。

UEFA インデックスはよく調べてみるとそれほど公平なものではなく、まず過去の欧州カップでの戦績で決めています。これはこれで問題ないと思いますが、もうひとつ所属リーグのランキングが加味されます。例えばスペインのバルセロナとお隣のポルトガルのポルト。この 2 つのチームがチャンピオンズ・リーグで同様のパフォーマンスを残したとしても、所属リーグのランキングでバルセロナが有利となり、人気リーグの実力チームが優遇される結果となります。

ラグビーワールドカップはチャンピオンズ・リーグを相当マーケティングして真似してきているのではないかと思います。

日本ではあまり報道されていませんが、ラグビーワールドカップがサッカーワールドカップとひとつ異なる点は、各国代表チームが長期合宿を経て大会に臨むことです。フランスやイングランドでは代表チームが年間4か月程合宿を行い、日本でも程同様です。実は、Jヴィレッジを最も利用しているチームはラグビー日本代表です。代表チームの力が強いというよりは、むしろ所属チームに力が無いので長期合宿を経てワールドカップに臨む事が出来、これによってワールドカップがラグビー界における最高の大会であることを保証されます。

また、ラグビーにおいてはウインドウマンズと言う代表チームが活動する月が決まっており、その間に1月近い海外遠征をすることもあり、まとまった期間、代表チームとして強化をすることが可能です。

サッカーについていうならば、代表チームが長期間の合宿をする機会は限られています。クラブチームの活動が主で、シーズン中のインターナショナルマッチデーの前に集まって合宿を行います。どうしても代表チームとしてのチームの熟成度はクラブチームのそれには及ばないと思います。その結果として、チャンピオンズ・リーグが最高の大会となるわけです。

強豪国で人気を沸騰させる、ビジネスとしてのワールドカップの成功についてですが、ラグビーはサッカーワールドカップと違い、開催が決まった段階で、IRBにかなりの額の保証金を払う必要があり、開催国の負担が大きく、貧しい国では開催は難しいです。

ラグビーワールドカップは新興国への普及という面では疑問符がつきます。先ほどワールドカップ予選に92か国が参加と言いましたが、それを疑ってしまう程に上位国のみで実施している印象を受けます。IRBオリジナル8にアルゼンチン、トンガ、イタリア、フィジーを加えた上位12か国でサッカーワールドカップの方が人気があるのは、おそらくアルゼンチンとイタリアくらいでしょう。下位8か国ではその逆で、サモア以外はサッカーのワールドカップの方が人気があるでしょう。

6. ラグビーワールドカップ、日本の挑戦

このようなラグビーワールドカップに日本がどのように取り組んできたか、簡単に話をします。

[下記資料参照]

- 1987年大会 唯一の冠大会（国際電信電話株式会社、現：KDDI）全チームが招待チームとして参加。未成熟なチーム編成で大会に参加し、3連敗。牧歌的な大会だったと言える。
- 1991年大会 大会予選において平日の秩父宮が満員になる。ジンバブエ戦で本大会唯一の勝利。
- 1995年大会 有名な145失点。この大会は145失点のみ焦点が当てられがちだが、大会史上ただ1回のIRBオリジナル8か国のうち3チームが予選リーグでぶつかる歴史に残る「死のグループ」であった。アイルランド、ウェールズ戦では善戦したが、ニュージーランド戦は不可解な結果となっ
てしまい、この大会で日本のラグビーブームは去ったと言われている。
- 1999年大会 前回と対照的に安易なグループに入り、平尾監督が外国人を多用するも惨敗。
- 2003年大会 スコットランド、フランス相手にあわや勝利を手に入れる試合を見せるも惜敗。ここで力尽き、続く2試合も敗退し全敗。善戦が称えられ、Brave Blossomsの称号を得る。内容的には一番良い大会であったと言われている。
- 2007年大会 ジョン・カーワンが指揮を執り、日程上の問題もありBest8進出、Best12獲得の為にオーストラリア、ウェールズ戦はBチームで戦い、結果は失敗。2011年大会で非難された戦いを前回大会でもやっていた。
- 2011年大会 資料のような状況下で期待された大会であったが、勝ち星を計算していたトンガ、カナダに勝てず、結果のみならず選手起用等、内容にもネガティブな評価がされた。

6. ラグビーワールドカップ、日本の挑戦

開催年	予選	本大会での戦績
1987年	招待 (唯一の冠大会)	●米国 18-21 ●イングランド 7-60 ●豪州 23-42 未成熟なチーム編成で敗退
1991年	韓国を破り アジア・太平洋2位 (西サモアに敗れる)	●スコットランド 9-47 ●アイルランド16-32 ○ジンバブエ 52-8 ジンバブエ戦はこれまで唯一の勝利 大会最多得点差試合
1995年	韓国を破り アジア1位	●アイルランド 10-57 ●ウェールズ 28-50 ●ニュージーランド 17-145 歴史に残る「死のグループ」、145失点
1999年	韓国を破り アジア1位	●サモア 9-43 ●ウェールズ 15-46 ●アルゼンチン 12-33 組み合わせに恵まれ、外国人を多用するも惨敗
2003年	韓国を破り アジア1位	●スコットランド 11-33 ●フランス 29-52 ●フィジー 13-41 ●米国 26-39 全敗するが、Brave Blossomsの称号がつく
2007年	予選形式の変更 アジア1位	●豪州 3-91 ●フィジー 31-35 ●ウェールズ 18-72 △カナダ 12-12 カナダ戦のロスタイムに追いつき、引き分け
2011年		初めての2大会連続同一の監督(ヘッドコーチ) (ジョン・カーワン) 2019年ワールドカップ開催決定後初めての大会 1試合を残して予選突破決定 大幅な外国出身選手の起用
		●フランス 21-47 ●ニュージーランド 7-83 ●トンガ 18-31 △カナダ 23-23 試合結果だけではなく内容にも厳しい評価

7. アジアのオールブラックス、ジャパン

本大会の苦戦に対し、日本はアジアにおける“オールブラックス”の地位を得ています。アジア予選で苦戦したのは1991年大会だけで、1995年以降ワールドカップ出場枠はアジアで1か国ですが、近年はよほどの事がない限り日本が出場権を獲得しています。2011年大会出場国は、2010年アジア5か国対抗において決定されたが、ミスプリントと見間違われるような試合結果でした(韓国戦:71-13、アラビアンガルフ戦:60-5、カザフスタン戦:101-7、香港戦:94-5)。1998年12月のアジア大会、韓国戦以来アジア諸国には無敗を続けています。

ラグビーにおいては、新興国が急に強化をする事が難しい大会フォーマットになっています。例えば中東の国がラグビー強化の為に、オールブラックスクラスの選手を大勢帰化させても3年程戦わないと、アジアのトップレベルの試合に出場できない事になっています。

8. プレミアリーグ化するジャパンラグビートップリーグ

一般にトップリーグと呼ばれている“ジャパンラグビートップリーグ”が近年プレミアリーグ化しています。日本代表選手30人のうち、イングランド2部、ノッティンガムでプレーするジャン・アレジ(かつてNTT関西に所属)を除く、29人がトップリーグ所属です。

日本代表30人のうち12人が外国出身の選手となりますが、トップリーグには他国のワールドカップ出場選手も所属しています。今大会は少なかったのですが、2大会前の2003年大会では15人の他

国ワールドカップ出場選手がトップリーグでプレーをしており、日本代表にいたっては30名全員が所属していました。つまりサモアやフィジー代表選手の中で、ヨーロッパのトップリーグではプロにならないレベルの選手が日本のリーグでプレーをしています。サッカーで例えれば、マンチェスター・ユナイテッドやバルセロナには入れる実力のない選手がJリーグでプレーしていると考えてもらっていいと思います。

また、強豪国のワールドカップ経験選手も多数トップリーグに所属しています。いわゆる年金リーグではなくバリバリの現役選手たちです。何故年金リーグにならないかというと、日本のシーズンは秋冬で南半球のシーズンと掛け持ちが可能な為です。つまり南半球の選手は、日本のリーグが終わった後に南半球のチームに移籍をして行きます。そしてJリーグと同様にトップリーグにもアジア選手枠が存在するのですが、マレーシアという国は何故かラグビー選手に簡単に国籍を発行してしまっていて、それを利用してトップリーグのほとんどのチームに“マレーシア国籍のニュージーランド、オーストラリア出身者“が1名所属しています。以下が2011年ラグビーワールドカップに出場し、今季トップリーグに加入した選手です。

■パナソニック

ジャック・フリー (南アフリカ)

■サントリー

フリー・デュプレア (南アフリカ)

ダニー・ロソウ (南アフリカ)

■サニックス

ブラッド・ソーン (ニュージーランド)

■リコー

マア・ノヌー (ニュージーランド)

ジェームス・ハスケル (イングランド)

■NTTドコモ

ミルズ・ムリアイナ (ニュージーランド)

イングランドのジェームス・ハスケルはワールドカップの試合に出たり出なかったりといった状況でしたが、その他の選手は全てIRBオリジナル8のスターターでした。

このような一流選手がトップリーグに加入しましたが、それによって観客が増えたかといえばそんな事はありません。先日の早慶戦では19,000人集まりましたが、トップリーグでは一流選手がプレーするにもかかわらず3,000人から4,000人、一番多くて8,000人集まった試合があったかな、という状況です。

ちなみに日本のサッカーの試合で初めて札止めになった試合はネルソン吉村のデビュー戦、JSL ヤンマー対八幡製鉄戦でした。それに比べると如何に彼らが注目されていないかがわかります。

9. 2019年ラグビーワールドカップ日本開催

最後に2019年ラグビーワールドカップ日本開催についてですが、1987年の第1回ワールドカップ出場から日本は7大会連続出場していますが、第1回大会から連続出場しているチームの中でこれほど弱いチームは日本、ルーマニア、カナダ、アメリカ(1大会出場できず)の4チームだけで、その中で一番パフォーマンスが悪いのは日本です。2003年にはトップリーグが開幕し、なんと2005年に今回2011年ワールドカップ開催に立候補して敗退しています。今考えると、もし招致に成功していたらどうなったのでしょうか。そして2009年に2015年、2019年のワールドカップ開催に立候補し、2019

年の開催が決定しました。2015年大会はイングランドで開催されます。

サッカーとの比較ですが、1993年にJリーグが開幕し1996年に韓国との共同開催が決定。1998年に予選を突破し本大会に初出場、そして2002年本大会を開催し予選グループを突破しました。

3つの史上初が2019年ラグビーワールドカップにはあります。まずはIRBオリジナル8以外での開催。そしてトップ10以外、いわゆる“ティア2”の国での開催。ラグビーの時間軸においては、向こう8年間で日本がトップ10に入る事は事実上不可能です。最後にサッカーの代表チームの方が人気のある国での開催。こう見ると、2002年サッカーワールドカップはかなり多くの面でチャレンジでしたが、2019年はより大きいチャレンジですね。

ラグビーワールドカップは国際的にかなり認識されているスポーツイベントですので、ここでの成否が世界のスポーツシーンに日本が与える影響は大きいと思います。

〈第Ⅱ部. ディスカッション—NO SIDE : 活発な意見交換を〉

1. ワールドカップの成功とは？

浦和：ラグビーワールドカップは何を持って成功とするのかが、まだ日本の中では議論されていないと思うのですが。これだけお金を叩いて開催するのに、現場では「駄目だろう」という話しか出てこないように思います。これまでラグビーに関心のなかった人たちへラグビーの輪を広げなくてはいけないのに、ワールドカップ開催決定を機にラグビーに興味を持ってくれた人に対して、あまりアピールできていないのが現状かなと思うのですが。

井上：何を成功とするかと決める際に、地元開催、地元優勝を期待するのは日本国民1億人だけでありまして、私も期待はしていません。それよりはむしろ、今回のニュージーランドではグルジア対ルーマニア、ロシア対アメリカ、このような試合でも満員になっています。フランス大会でのカナダ対日本、この究極の消化試合ともいえる予選リーグ最終戦でも満員になっていました。2002年のサッカーワールドカップでもカメルーン対アイルランドやサウジアラビアの試合でも満員になっていましたよね。もちろん日本の試合では「日本頑張れ」ということで満員になるでしょうが、それ以外の試合にも関心を持ってもらえるのか、それが成功に関わってくると思います。先ほども言った通り、これだけのレベルの選手がいるトップリーグには数千人しか見に来ず、それから4ランク、5ランク下がる早慶戦、早明戦にはお客さんが入る。日本スポーツ独特の対抗戦という伝統はあると思いますが、愛校心を持って早稲田や慶應を見るだけではなく世界のトップを見ているよ、というのが日本人にないと、そこを外して成功には近づかないなと思っています。

2. 2019年大会招致の経緯—世界のラグビー界の構造の中で

中塚：そもそもどういう経緯や意図を持ってラグビーワールドカップを招致しようという話になったのですか？そこがある程度明らかになれば、今後のラグビーワールドカップが何を持って成功とするのかが見えてくると思うのですが。

浦和：ラグビーマガジン等を読む限りでは、2003年のワールドカップを電通の社長と当時のラグビー協会、森会長が見ていて、こんなに盛り上がるなら日本でやろうという話から始まったと。

井上：サッカーとラグビーを比較すると、絶対ラグビーの方が盛り上がる。それはどういう事かという
うと、ラグビーはワールドカップが最高に大会になるように仕組みられている。チャンピオンズ
・リーグはサッカーワールドカップにどれだけ影響を与えているか。悪影響というわけではな
いですが、チャンピオンズ・リーグが盛り上がるにつれ、相対的にワールドカップは「何
だかシーズンオフに集まった混成チームが大会やってるね」といった傾向になってきてしま
いましたよね。

参加者：それはそうですね。

井上：だから、ラグビー界はわかっているんですよ。チャンピオンズ・リーグが如何にワールドカ
ップの価値を相対的に落としてしまったかという事を。

参加者：ラグビーでも南半球でスーパーラグビーとトライネーションとで同じようなことが起きつつ
ありますよね。

井上：そうですね。うまく出来ていて、スーパーラグビーはチャンピオンズ・リーグにあたるクラブ
の大会、トライネーションは欧州選手権にあたる国別対抗になります。ヨーロッパでは前者が
ハイネケンカップ、後者が6か国対抗といえます。

参加者：南半球では選手がこなす試合数が多いので、相対的にテストマッチの価値が下がってしまっ
ているので、スーパーラグビーとトライネーションをお互いに魅力のある大会にする為に、調
合し合わないようになっています。

中塚：すると、ヨーロッパではクラブの大会としてハイネケンカップがあり、国別の大会として6か
国対抗があって、南半球のようにお互い棲み分けが出来ているのですか。

参加者：分かれてはいなくて、同大会を平行して実施しています。

井上：今回は面白い話がありました。皆さん、アディダスのコマーシャルにデビッド・ベッカムと一
緒に出演していた、イングランドのジョニー・ウィルキンソンという選手をご存知でしょうか。
彼はフランスのトゥーロンというクラブチームに所属しているのですが、10月8日にイングラ
ンドがフランスに敗れたその翌週の10月15日、ワールドカップの本大会がまだ行われている
のにも関わらず、クラブのフランスリーグの試合に出場していました。

◆報告書作成者 注)

2011年、6か国対抗戦は2月4日～3月19日に開催。ハイネケンカップはグループリーグを10月8
日～1月23日に、決勝トーナメントを4月9日～5月21日に実施。そしてワールドカップは9月9
日～10月25日に開催された。

井上：世界でトップレベルのラグビーのリーグで、ワールドカップ期間中にリーグ戦を停止していた
のは日本だけですので、その点もトップリーグの魅力になっています。

参加者：一昔前だと、イングランドの選手はワールドカップに出場を許されたが、トンガ人はクラブ
がリリースしてくれなくてワールドカップに参加できないなんて事例もありました。

井上：あんまりお金がかかっていないんですね、ラグビーは。お金というかつまり契約みたいなかたちでラグビーは。

また、昨年秋に来日したサモアは来日時期がウインドウマンズの11月ではなく10月だったということもあって、主力は欧州のクラブがリリースしてくれなくてBチームが来日しました。

中塚：その辺のマッチメイクに関してまではIRBは関知しないのですか。

井上：そうですね。これはクラブチームの話ですからね。

3. IRBの使命と実状—FIFAとの違い

中塚：話は戻るかもしれませんが、サッカーは各国のFAが集まってFIFAが出来るわけですが、もう一方でルールを統括する組織としてInternational Football Association Board (IFAB) というものがあるって、それはFIFAとは別に競技会の運営には一切顔を出さないじゃないですか。ところがラグビーの場合はIRBがFIFAとIFABの性質を兼ね合わせているわけですよね。そのあたりがいつもわからなくなるのですが。

井上：逆に言うと、どちらかが真似をしたんでしょうね。

参加者：ワールドカップが開催されるまでは対抗戦しかなかったのが、FIFAのような存在は必要なかったのではないのでしょうか。

井上：ちょうどワールドカップを始める段階で日本、カナダ、フィジー、トンガ、アメリカ、アルゼンチン、イタリアがIRBに入れてもらっています。

中塚：それでこの大会に招待されているのですね。その時点でIRBの性質が変わってきたのですね。

牛木：FIFAとIRBの違いについてですが、IRBは色々な国でやっているラグビーを同じルールに統一するための機関ですね。いわゆる試合をする為のルール作りという本質があったわけです。FIFAの場合は、FAがルールを既に決めていたので、大会を試合をする為に各加盟連盟の連合体としての使命を持って生まれました。ルールに関してはこの後どう変えていくかが問題であって、英国4協会と折衝を繰り返す中で現在の形に収まってきました。

世界中でラグビーをするようになって、IRBも加盟連盟の統括団体としても性質を帯びつつあるのが、歴史上の流れだと思います。

話がだんだん横に流れていってしまっていますが、最初の質問であるラグビーワールドカップ日本開催の成功とは何か、招致の意図とは何かをもう少し詳しく聞きたいのですが……。

参加者：確かに、1987年に日本がIRBに加わるまではルールが変更されても何の通達もなく、日本はイングランドの協会に頼んで変更について教を請っていたそうです。つまり8か国だけでルールも何もかも決めて他の国には連絡もしないという凄い組織でした。

井上：例えば、ラグビーではスターターは1番から15番までの背番号をつけると日本人は長らく信じてきましたが、IRBの決めたルールではテストマッチでのみ適用されます。日本は律儀な国で、IRBのテストマッチルールをずっと真似して国内のルールに適用してきました。日本は本物を

志向するというのが日本協会にあったようです。

そもそもルールを世界で統一しようという気はなく、8か国で対抗戦をするためのルールをBクラスの国が真似をしていて、たまにトップクラスの国と試合をするというのが日本の位置づけです。

ちなみに日本は1987年のワールドカップまでに8か国のうち南アフリカを除く7か国とテストマッチをしています。8か国側がテストマッチと認めた例は1973年のフランス戦のみです。すなわち他の試合は国際試合として認められていません。

牛木：そういう意味で、国際化が始まったのはワールドカップが始まったからです。ワールドカップの初期で私が知っている話は、そもそも大会を始めようと言ったのはパトリック・ナリーです。彼はロンドンのタイムズのラグビー担当だったピーター・ウェストと共にウエスト・ナリーという会社を作った人物です。彼らは何を考えたかという、アメリカでプロスポーツになっているもの以外の普通のスポーツを商業化しようと考えたわけです。そこでFIFAのワールドカップに食い込んで、1978年アルゼンチンと1982年スペインの2大会の広告をウエスト・ナリーが扱いました。ところがアディダスのダスラーと仲違いし、FIFAワールドカップの権利を失った結果、ラグビーに目を付け、ニュージーランド、オーストラリアをたき付け、ラグビーのワールドカップを始めるに至りました。ですからラグビーワールドカップは、背景に、割と商業的なものがあったんです。このような流れの中でアマチュアリズムが時代遅れという事もあり、ラグビーは変わってきました。ヨーロッパが変わってきたといえます。その当時日本はガチガチのアマチュアリズムですから、そんな事には全く気がつきませんでした。日本ラグビーがアマチュアリズムを放棄したのは非常に遅く1995年ですね。そういったことで商業主義やプロフェッショナリズムを加味しないと、この歴史はわからないですよ。

4. ラグビーにおけるピュアな伝統

井上：アマチュアリズムの点でいうと、サッカーワールドカップと近代オリンピックを始めたフランスがラグビーワールドカップに関してはめずらしく何もしていないんですね。フランスのIRB加入がこれほど遅れた理由は、プロの選手を認めたとして一度5か国対抗から追放された歴史が関係しています。

参加者：フランスがやっている労働者スポーツ協会が母体になっているラグビー組織もありますよね。それは今活動しているのですか。

井上：活動しています。ただこれだけ15人制のプロフェッショナリズムが盛んになっていると、こちらは活発とはいえません。ラグビーで15人制が主な国というのは日本が極めて珍しい存在です。13人や7人でも行われているラグビーで圧倒的に15人制が普及しているのは日本の特色です。

参加者：リーグラグビー（13人制）が認知されていないのは日本くらいということですか。

井上：かつては13人制のラグビーがプロとして認められていて人気があった事もありました。そういった意味では日本は本当にピュアなところだけを信じて世界のラグビーを追いかけてきたという、逆に誇るべき文化です。つまり全く混じりけのない遺伝子のみを追い求めてきているのが、日本ラグビーの100年の歴史になっています。そういう点で、今の流れのプロフェッショナリズムや外国人多用に対する、特にオールドファンのしらせ方というのは、2019年に関してはバックギアになっているのではないかと思います。

参加者：外国人の話ですと、ニュージーランド等でもフィジーやサモアの選手がいたり、全員がニュージーランドの出身ということではなく、別に全員が同じ民族である必要はないという考えがある一方、日本は大和民族じゃない選手がいるのは何故なんだと非難される。他の国がマルチカルチャーのなかでナショナルチームを編成しているところで、すこしズレがあるのかなとは思いますがね。

牛木：そういう日本のピュアで良かった伝統はワールドカップをやる事によって崩れるかもしれない。

参加者：いや、もう崩れましたね。

5. ワールドカップをなぜ日本で開催するのか？

牛木：そういったなかで、ワールドカップを何故日本でやるのだろうか、ワールドカップをやることによって日本のラグビーの将来をどうしていこうと、或いはスポーツの将来をどうしていこうというプランやイメージ、サッカーでいうところの 100 年構想のようなものがあるのかどうかを聞きたいのだけれども・・・・・・・・。

井上：私が答えてはいけないのですが、そういったものは無いんでしょうね、きっと。

参加者：何だか、やらなきゃいけないっていうのも何だかね。

井上：ただ私が調べてみたのですが、いろんな世界大会で日本でやっていないのはラグビーぐらいなんです。

牛木：やってないからやろう、というのでは・・・

井上：日本の経済力があれば出来るんですよね、世界選手権は。

牛木：招致の意図と、成功とは何か、とは違っていて、招致の意図ないし動機は、直接的に言えば電通がお金を使いたいからなんですよ。まあ露骨に言えば。日本のラグビーが電通と IRB を儲けさせてでもワールドカップを開催するのならば、そこに意義がなくてはいけません。その意義というものが何かをはっきりと我々に示さないと、ラグビーワールドカップをサポートしようじゃないかとは我々もなかなか言いにくい。だから、招致の理念が何かというのを知りたい。

参加者：サッカーのワールドカップを招致し始めたときには、プロリーグはほぼ無い状態でしたよね。その時はどういう夢で招致しようと思ったのですか。一番はじめに 2002 年に繋がる動機というのは何だったのかというのが疑問なのですが。

井上：唯一のものはサッカーやラグビー、オリンピックもそうだと思いますが、一般的にスポーツイベントを通じて青少年なり国民の健全な発達という理念は全て同じだと思います。

参加者：大きい大会を開催する事に寄って、競技の輪を広げていこうということですか。

井上：あと 2022 年のサッカーワールドカップがカタールで行われるように、普及していない国に広げ

ようというのはあると思いますね。ただ IRB が普及していない国にラグビーを広めようと本気で思っているかということ、今日の私の発表でわかる通り、「8 か国の中でやろう、あとは少し友達つれてきていいよ」といった感じで、日本はそのお友達なわけで、正式なテーブルに就けていない状況ですね。

牛木：IRB が何故日本で開催するのかではなく、日本が何故自国で開催するか、その意義を聞きたいのですが。

参加者：強いて言えば、このままいくと落ちていくだけだからみんなで目標を作ってということくらいしか思い浮かばないですね。

中塚：ラグビー界の中からはニーズはあったのですか？ スクールウォーズの時はサッカーより人気があったのがどんどん下がってしまって、なんとかこれを起爆剤にしたいというような…。

嶋崎：トップリーグにおいて、それはあったと思います。日本の国内リーグを強化する事がラグビーの普及や強化に繋がるという意図があって、お客さんは入っていませんが競技面では強化が進んでいます。非常に良い試合、良いプレーが見られるようになり、見る側にも勉強なり、日本選手のレベルアップにもなっています。ここまではおそらく選手側からのニーズがあったと思いますが、ワールドカップ開催に関しては、競技者側からのニーズは無かったと思います。私もラグビー協会の役員になっていますが、開催が決まった時に思ったことは、「わっ、どうしよう。これどうやってやったらいいのだろう。」でした。日本協会は前から ATQ Projekt といってクォーターファイナルに入ろうというプロジェクトを日本代表の強化について行っています。クォーターファイナルに入るという事は決勝トーナメントに残る事、ベスト 8 に入る事です。そういう点では、ワールドカップを日本に持ってきた時に、サッカーは 2002 年に決勝トーナメントに残る事を達成しているじゃないですか、それでよしラグビーも、という気持ちもあると思います。

あと、森会長になってから、ラグビー界は政治力が強くなりました。森会長は元首相ですので国内外で発言力が増し、色々な事が通るようになりました。ですので、先ほどの森会長と電通の間の「これやろうや」程度のノリというのは、まあ真実じゃないのかなという気がします。今、2019 年対策室を作っていますけれども、具体的にそこからは何も発信されていないのが現状ですね。そのためにユースの強化をどうしていくとか、どこの都市で試合が行われて等も発信されてきていないです。

6. 日本ラグビーのレベルアップのために一弊害となるマッチメイクの仕組み

井上：その政治力がマッチメイクに発揮されているとはいえないですね。本当はフルメンバーの代表チームとテストマッチをしないといけないですよ。格上のチームとの対戦でいうならばフルメンバーの代表チームと日本は過去 1 年間で 1 試合しか試合をしていません。今年 7 月に来たサモア戦のみです。去年秋のサモア戦とカナダ戦、今夏のイタリア戦は相手はフルメンバーではありませんでした。

参加者：B チームのナショナルチームと戦うより、所属している外国人を全部出した東芝やサントリーと試合をした方が力がつくのはないですかね。

井上：そこが日本ラグビーの悲劇です。サロンの方ですからサッカーの事情は詳しいと思いますが、

1980年代に日本サッカーリーグを引っ張ったのは読売クラブでした。読売クラブの方が日本代表より強いと言われ、ファンも日本代表よりも読売クラブの試合を見たかったわけです。現在のラグビーのトップリーグには読売クラブに相当するチームが5、6チームあります。これは別に読売クラブの例だけではなく、現在のバルセロナとスペイン代表も同様かもしれません。しかし、バルセロナはチャンピオンズ・リーグなどの国際試合のチャンスがありますが、現在のトップリーグのチームには国際試合のチャンスはありません。

また、代表チームのランクアップについてもそう簡単にいきません。先ほど話した通り、日本がテストマッチで戦うことができるのは似たようなレベルのランキング2桁台の国です。そしてランキング1桁のチームと対戦できるのは4年に1回のワールドカップだけです。

最近の習熟度別クラス編成でいうならば、期末テストや中間テストでいい成績をとってもクラスの中での席順が前に行くだけで、なかなかクラスが代わるところまではいきません。1回の試験で上のクラスに代わることができるのは4年に1回の全国模試だけというようなものです。

参加者:とにかく勝ち続けないと、強いチームと試合が出来ないのがラグビーのテストマッチですね。

小林:だから横綱はせいぜい関取ぐらいまでとしか相撲をとらない状況ですよ。

牛木:1960年当時の日本サッカーのレベルは相当低いものでした。それが1964年の東京オリンピックを睨みデットマール・クラマーを招聘して代表強化に着手し、東京オリンピックではアルゼンチンに勝利を収め、1968年メキシコオリンピック競技では銅メダルを獲得するに至りました。この強化方法は集中強化方式といえるもので、東京オリンピックの為ということで企業の協力を得られ、良い選手を集めひとつのクラブのようにして強化を進めました。その延長でメキシコ五輪までの8年間強化を続けることが出来ました。銅メダル獲得はもちろん大きな成果でしたが、それ以降代表チームの強化は前進しませんでした。集中強化方式では釜本、杉山といった選手が引退すると後に何も残らなくなってしまいました。

その当時の日本サッカーと世界のレベル差と比べると、現状の日本ラグビーと世界のそれはずっと近いところにあると思います。2019年ワールドカップまで、同じ8年間が残っている事を考慮すると、ラグビー代表の強化について可能性はおおいにあると考える事が出来ると思います。ただ、集中強化方式でとにかくベスト8へというのと、さらにラグビーの将来に繋がる強化方針で進むべきなのか。そういった議論をすべきであって、ラグビー協会側では既になされていると思うのですが、そのところを具体的に伺いたいのですが。

井上:まず言えることは、時間はあるかもしれませんが機会が少ないということです。テストマッチのスケジュールは2、3年先まで既に決まっていて、例えば日本協会とアルゼンチン協会が合意してテストマッチを組もうとしても認められません。試合に勝っていくと多少テストマッチを組める国のレベルが上がる程度で、強豪国と自由に試合をすることは不可能なのです。

参加者:今回のワールドカップで一番問題となったのが、予選グループで3位に入ればトップ12に食い込み、テストマッチの相手も格上げさせることができたのですが、最下位になってしまったので今後4年間に大逆転の機会は巡ってこず、ひとつひとつ地道に勝利を積み上げて試合相手の格を上げていくしか無くなってしまったことです。実際の強化の為の時間は4年後から始められる可能性がある程度なのです。

牛木:それは、そういう条件なのだから仕方がないのですよね? その条件のもとでどのような8年計画を立てるかが大事なのではないですか。

井上：強化という面では、実力をつける強化とテストでいい点を取る強化は異なると思います。実力をつける強化に関してはトップリーグが有効的に機能することになるはずですが、これはトップリーグを一度見ていただければよくお分かりかと思います。ラグビーでテレビ中継と言うと大学ラグビーが中心ですが、ワールドカップとトップリーグの差の方が、トップリーグと大学ラグビーよりも小さいです。日本人選手も世界の優れた選手とマッチアップしていますので、その過程で実力は確実に付いていると思います。

しかし、トップリーグには先ほどお話しした通り、国際試合の機会はありません。つまりその実力をテストと言う場で発揮する機会はありません。そのテストと言う機会は現在ではワールドカップだけになっています。そしてこのテストの成績はこれまで話してきたとおりです。この強化の成果をどのように代表チームにつなげていくか、これが課題かと思います。

(続きの議論は「ルン」にて)

以上